

十一月六日

朝九時より新宿オゾンでA3ワークショップ。レクチャーは私の開放系技術論と鈴木博之の建築における転換点。鈴木はジョン・ラスキンの思想、特に建築の七燈をひきながら自身の史観を説いた。労働の質に関して私も今日の講義でモリスをひきながら考えていたことなので良く理解できた。建築は時間の結晶でその時間は人生の結晶でもある、それ故に建築は保存しなければならぬという論理だ。又、鈴木はモリスはラスキンが構築した理念の実践者であると位置付け、共に時代の転換期の深層を形づくったとした。

「建築の世紀末」にはじまる鈴木単騎独行が深く、そして広く進んでいるのを感じた。レジュメにはレクチャーよりも広く語りたかった彼のヴィジョンが示されており、その短い言葉の並べ方から憶測するに、大転換期である今の特質を、教育、建築家像、建築、人生の意味という極めて総合的な視野から考えようとしているのが良くわかった。さすがである。友人を誉めても一銭の得にもならぬが、マア五〇半端を過ぎてなお傾聴するに価するレクチャーは稀少でもあり、良い時間を持てた。参加者、聴講者はほぼ百名程度で、四〇名程のプロジェクト参加者を得た。研究室の丹羽太一も含めて、千村さんという車椅子の障害者の参加を得た。小さなチャンスである。大事にしたい。参加者各自は大半が自分で家を建てたいという意欲を持った人なのでワークショップは面

白く展開できそう。世田谷村の活動との結節点を作れるかどうかポイントだ。広島の木本さん今日から世田谷村泊り。聖徳寺のプロジェクトに参加してもらおうつもり。

夜、鈴木、難波両氏と新宿の台湾料理屋でビール飲んで疲れをなだめる。

十一月七日

ワークショップ二日目

難波和彦氏講義、難波流のモダニズム論。次第に論は精密になつてゆく。箱の家シリーズを進行過程に沿いながら見続けているが、難波さんは自らが別種のハウスメーカーになっている事を実覚すべきだ。篠原一男は明らかに住宅作家であった。作家としてのスタイルを決めて、住宅は芸術であると宣言し、それを実行した。難波さんのスタイルも今のところ明らかに住宅建築家であり、そのポジションを作家性を外した技術を沿わせて、確立しようとしている。作家として芸術性を中心に表現しないと彼のスタイルを決めているから、今のところ技術が表現されていると割り切ろう。飛躍して言うが技術は現代では作家が私有することはほとんど不可能だ。ビジネスそのものであるからだ。ハウスメーカーはそれをブラックボックス化して商品としてのパッケージとして売る。難波さんはそれを「箱の家」というブランドですでに売っているのだが、設計料をとるという旧来のスタイルで難波本来の倫理性を守っているのが現状だ。つまり、旭化成の箱の家はビジネスそのもので、難波さんの箱の家はビジネスになり始めているのに旧来の建築家の論理倫理でビジネスとは別の体系を表現しようとする。

難波さんが歴史に残るとすれば住宅設計を作家性を越えたところ

るで新種のビジネスにするしかないのではないか。ベンチャービジネスの一つとして住宅設計を枠付け、そして設計料をいただくというシステムそのものを解体してゆくしかないのじゃないか。

私の住宅設計も同様な問題に直面しているのはいうまでもない。夕方、安藤忠雄のレクチャー。

学生の顔が皆生き生きとしている。スーパースターの役割はこれだ。広く建築を学ぼうとする人々に希望のようなものを与えてくれればそれで良い。パリのセーヌ河をサイトにしたコンペを勝ち取ったその案を見せてくれた。遂に世界の中心に辿り着いたのだという感を深めた。もう建築の良し悪しを論ずる水準ではないところに安藤はいる。

シラク大統領の犬の名前は「すもっ」というらしい。